

前のこととして熊野を守っていたのが、世界遺産に登録されたことでそれが明確に意識化されたということ。僕が調査に行くのと地元の人には「熊野って、そんなにすごいところなんですか？」という感じなんですね。それは厚い信仰心が日常的になるくらい、信仰というより習慣に近い形で熊野を守ってきたからなのでしょう。信仰というのは、脳の上位部分を使った高尚なことのように思われがちですが、暮らしの中でしつかり身についたものが、本当の信仰だと思います。

人がつくった最高峰の聖域「伊勢」、遷宮は日本人の美学

伊勢は熊野とは違い、「手つかずの自然」ではないという感じがあります。伊勢の周辺は常緑広葉樹林が広がっていて、本来、針葉樹の杉が生えているような場所ではありません。ところが、伊勢では僕らが歩くところだけは杉並木で、それ以外

宗教学者もアーティストも魅かれる三重県

日本で三大聖地といえば、出雲、熊野、伊勢です。そのうちの2つが三重県にあるのですから、もともとすごいところなんですね。明治以降、神仏分離などさまざまな宗教に対する制約が加えられ、日本の宗教は大きく性格を変えました。この100年で失われたものはたくさんある。でも、それらが完全に姿を消す前に、何とかしたいと僕らは調査しています。文献だけではなく、足で歩いて目で見て調査しています。

三重は、アーティストや建築家などのクリエイターが魅かれる土地だと思えます。作品の題材にするためではなく、アートとは何か、建築とは何か、環境とは何かを考える時に、最も重要な場所なんですね。伊勢のように非常に手の込んだ繊細な方法というのは誰にでもできることではありません。そしてそれはアートの基本です。



豊受大神宮(外宮) ©2012年 松原豊

は全部広葉樹。これは聖地の多くが山の中で、杉などが生えている場所にあるから、訪れる人びとに同じような感じを与えようという仕掛けなのかもしれません。

ドイツの建築家ブルーノ・タウトが伊勢に行った時「言語を絶するほどの感銘を受けた」という有名な言葉を残しているように、伊勢は、非常によくつくられた、人間が

単に小手先のことでではなく、「人間の造るもの」は一体何か」ということを考えさせられる場所なのではないかと思えます。

日本人の根本、芸術の根本が、三重にあると言っても過言ではないでしょう。



Profile 植島啓司(うえしまけいじ)

1947年、東京生まれ。東大大学院人文科学研究科博士課程修了後、シカゴ大学大学院留学。NYニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチ客員教授、関西大教授、人間総合科学大教授などを歴任。

これまで世界100カ国以上を訪れ、現在も年間200日以上、聖地を旅して調査をしている。

著書に「日本の聖地ベスト100」「世界遺産神々の眠る『熊野』を歩く」「偶然のチカラ」「熊野 神と仏」(共著)などがある。

つくった最高峰の聖域という感じがしますね。

今年は式年遷宮の年ですが、遷宮は日本人の美学です。日本人の美意識に「流れ」があります。川や水そのものに何かがあるのではなくて、流れているということに重要性を見出すのです。遷宮も全く同じで、20年に一度遷宮をする、建物は何百年でも保てるのにつくり直すというのは、始原の時を呼び起こす、それを繰り返すという行為です。

永遠という概念でも、パルテノン神殿などは石造りだから耐久年数が高いといわれますが、いつかは滅びるわけです。でも「繰り返しされる永遠」は滅びることはなく、建物が壊れようが滅びようが、繰り返しされる限りは永遠なんです。

多くの祭りの元々の意味は「始まりの時を繰り返す」ということで、遷宮にはそれを目に見えるように物質化して伝えていこうという意図が見られます。この時期にお参りに行く価値は大きいですね。